



武田泰淳全集

第十卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第十卷
昭和四十八年三月二十五日 第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑 摩 書 房

電話 東京(元)七六五一(代表)
振替 東京 四一一二三
郵便番号 一〇二一九一

印刷 株式会社 三 松 堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72410 (出版社) 4604

武田泰淳全集

第十卷

第十卷 目 次

富 士…………… 3

補 遺

民族文化について…………… 379

中国言語問題…………… 390

『湖南の兵士』解題…………… 394

上海の出版物…………… 398

野間宏著『青年の環』…………… 400

ジャン・コクトオ『アメリカ紀行』…………… 401

井上靖著『雷雨』『死と恋と波と』…………… 402

誰のために小説を書くか？…………… 403

檀一雄著『長恨歌』…………… 404

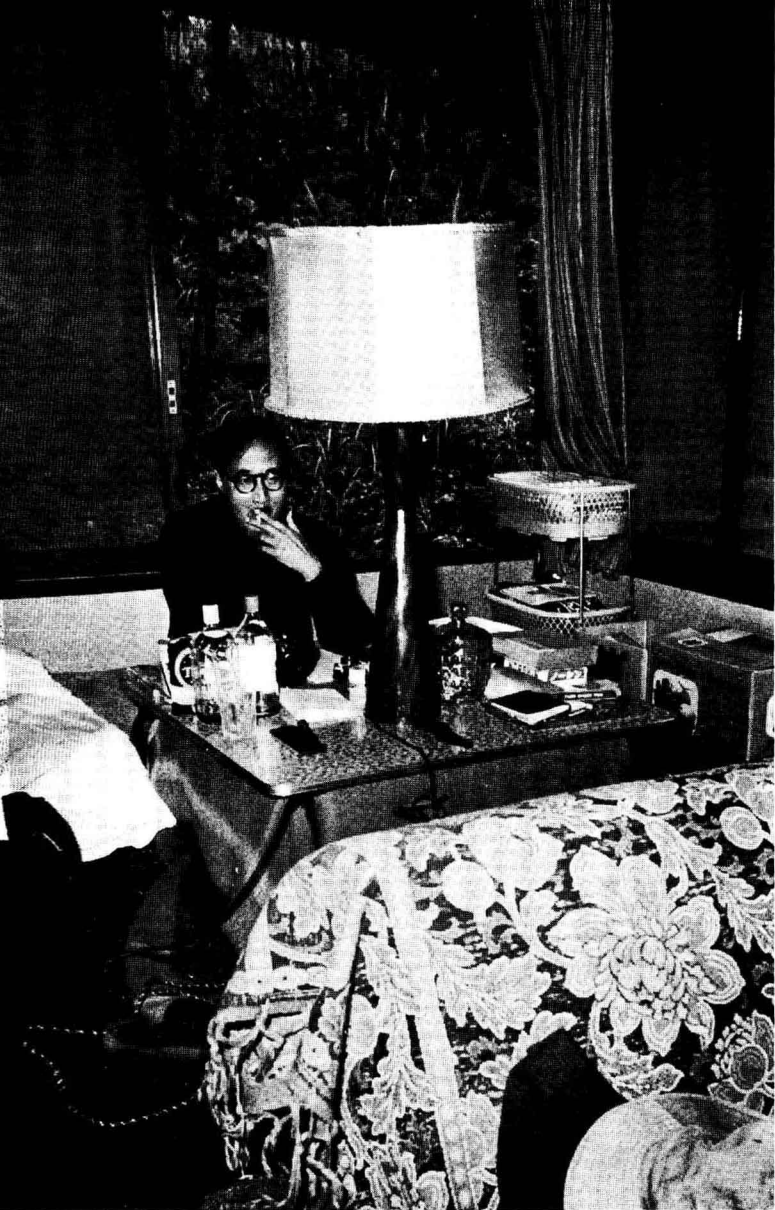
安部公房著『壁』	405
包容力に富む文化態勢	406
丁玲著『霞村にいた時』	408
サルトル著『文学とは何か』	408
目撃者の記録	410
エレンブルグ著『作家の仕事』	411
寺田透著『現代日本作家研究』	413
現代中国文学全集8『沈從文篇』	414
「ロミオとジュリエット」の素晴らしさ	415
エレンブルグ著『雪どけ』	418
『女の宿』あとがき	419
吉川幸次郎著『西洋のなかの東洋』	420
長与善郎『わが心の遍歴』によせて	421
六月の風	422

現代の仙人よ、飛びつづけよ！	423
中江丑吉書簡集	425
「五十三次」と「三十六景」	428
『増田涉博士還暦記念論文集』序	430
文化大革命についての私の感想	432
異国の酒買い	433
島尾敏雄『硝子障子のシルエット』	435
身心快樂 如入禪定	435
解 説	443
丸谷才一	
解 題	451

小

説

10



(中央公論社提供)

富士の山荘にて 昭和四十六年秋
長篇小説『富士』の原稿の大部分はここで執筆された。

富 士

序章 神 の 餌

リスの尾の方がリスの顔つきより、感情をよくあらわしているにちがいはなかった。

あたまで尾を折りかえして、パンをたべていたリスと、長い尾をそのまま雪の上に敷いて食べるリスとでは、ずいぶん性格もちがうだろう。だが、私はいつも、一匹のリスが気分によって尾っぽのとりあつかいをちがえるのか、それとも、二匹の別のリスが習性として、ちがった尾のとりあつかいをするのかわからなかった。

小鳥となれば、さっき来た小鳥と、今来ている小鳥とがなかなか区別がつかかねるけれど、リスの場合も、姿を見せるのが単数か複数か見きわめにくいのは困ったことであつた。

それでも雪の白さの上のリスの動作は、わかりやすい。春のリスの方が、秋や冬のリスより痩せて色つやがわるいように思われる。

もう陽が射しかけはじめている。細い雑木の細い影が雪の上に、それほど黒くない黒さでのびている。

小鳥がパンをついばみに来ても、リスはむろんかまわずにやってくる。そんなとき、小鳥の方が平気である。あんまり近く、つまり同じ場所にまでリスが跳ねてくれば、身をよけるけれども、小鳥の方が一つ位置にとどまって、おちついてたべている。

木の根もとだけ、雪の面がくぼんでいる。あまり背のたかくない雑木の上の方から、陽が射しかけはじめる。すでに芽ぶいているうす緑いろの芽のツブツブが、陽のさしかけた部分だけ、ほんとうの色を示している。ほかの部分は、そんなこまやかな色の本質、変化にかかわりなく、ただ灰色の線のままである。

雪の中の花ざかり。それは、めずらしいことであつた。

リスの尾がふさふさと厚みのあるように見えるときもあり、尾の髓のまわりに生えた毛がすいて見えて、いやにたよりなく見えることもあり、それが温度や光線のかげんで同じリスの尾がそう見えるのか、それともちがつたリスのちがつた尾だからそう見えるのか、私にはたしかめられない。

石油ストーブに陽がさしかけはじめると、唐紙に、ストーブのまわりと上部に立ちのぼる熱気（空気の流動というのだろうか）がうつることがある。もっと強い陽が射しかければ、その影のまやもやしたうごきは消えてしまう。また戸をしめきつていれば、そんな現象がストーブのまわりに起っていることは知らないでいる。ずっと高みにある松の枝の影が唐紙に、まやもやより濃くうつりはじめると、そのまやもやの影は見えなくなる。

リスにとっては、一本の木から他の木へ横ざまに跳びうつるのが、一本の木を縦にのぼると同様に自然なルートではないだろうか。

イタチが来た。リスよりも毛がふくよかで、首の下など皺がよるほど毛がゆたかだ。リスとイタチの区別がやっとわかってきた。イタチは地をはうようにして、長い身体を低目にかまえてすべりよってくるのだ。

リスはやはり、二匹だった。松の幹は、皮がけば立っている、爪の音をたてやすい。バリバリと音のする方に目をやると、たしかに別々の松の幹を、別々のリスが上ったり下ったりしていた。私が、ベランダの椅子の上で、葡萄酒にむせて、ヘンなのどの声を発して、葡萄酒をふき出したので、彼と彼女の活動は止まってしまったけれども。

トゲトゲの木の細枝に芽ぶいた芽のツブツブの方が、おつとりとやわらかいトゲのない木の細枝に芽ぶいた芽より繊細のような気がする。トゲのない木の方は、なるほどやわらかそうであるが、だらしないように見える。

さっき別荘銀座の方を歩いていたとき、ブルドーザーでかき残された雪が、あの小豆や青豆の入った豆平糖、あの砂糖菓子の色でコチョコチに凍っていた。そして、ゴム靴がすべて手袋をはめてない手が傷ついたらしい。リスとイタチと木の芽に見とれていて、気がつかなかったのに、電気ゴタツにもどいたらビリビリと痛くなった。傷といえないほど小さいが、それでも濃い赤色と、黒みがかった紫色の点とスジが、三本の指の上半部についていた。それに、インキのしみもついているので、寒さで赤らんだ手ぜんたいが妙な色どりになった。

保護色がいいか警戒色がいいかと言えば、山の路のあるいているとき、私たちは警戒色をハッキリさせた方がいい

と思う。それに手袋と帽子も、はめたりかぶったりしていた方がいい。猟師が霰弾を放つころは、ほかの土色や灰色と区別できる、あきらかな色を身にまといたいないと、動物とまちがえられるからあぶない。正月の雪がまばゆい朝、猟銃の音が耳のそばでひびいた。遠くの下の方に、カンジキをはいた銃手たちが走りまわっていた。私と妻と娘は、ほんとうにこわかったので「あんなに射って、あぶないなあ」と私がわざと大きな声で言った。すると、そのたくましい山男たちの一人は「なんだってえ。そっちへ向けて射ったかよう。そっち向けて射っちゃいねえだろ」と、遠くの方から大声で叫んだので、私たちはだまって、おとなしく彼らを見守り、やがて見守ることもやめにしてしまった。彼らが怒り出したら、どんなことをされるやら、わからなからだ。

その二匹のリスは、かならずしも仲良く共同生活をいとなんでいるようにも見受けられないことがあった。餌をついばむとき、二匹はてんでんばらばらに動き、二匹がよりそって一カ所で静かに食べることがない。あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、あわただしく無関係に走りまわり、別々の場所へよけたり避けたりして、めいめいが食べているのであった。イタチの通った路を、なるべく警戒してよけて通ることは不思議ではない。縦にまっすぐにイタチが

ベランダに近寄ってきたあとでは、リスはたいがいその直線のあとをたどらないで、横に、遠くわたって行く。彼らにとり椅子も樹木も同じものである。

夜明けの霧の中のさくら。まだうすぐらい朝の霧につつまれて、かえってさくらの花、花のむれがきわだって白くあざやかに見えるのだった。ほんの小さい、大きな草ぐらの、背のひくい株についている、ほんのわずかな花も、おやこんなところにと気がつくのであった。ようやく小鳥たちが、鳴きかわしはじめ、その声は高いので、その方に気をとられながら、花の白さにもまたほんやりと目うつりがして、霧はさほど、ぬれてこないものであった。

あまり太くないさくらの幹や枝も、ほかの雑木の幹や枝と、かわりなく、風にもゆれず、しずかにまじって仲間入りしているだけなのに、点々といっている白い花のため、それとわかるのだった。もうリスが来ている。熔岩の赤さや黒さ、色のちがいもまだはつきりしてはいないので、リスの色は岩の色とかわりなかった。インスタントラーマンが撒いてあるのに、それはあまり気に入らないかして、食べようとしなくて、ただ岩から岩へとびうつったり、はねまわったりして、どこかへ行ってしまう。

あまりリスにばかり注目していると、そのうすぽんやりした明るさの中では、小鳥まで小さなリスのように見えて

くる。小鳥も実はリスとあまりかわらない、すばやいうごきをしているからであろう。白樺だけは、霧の中でもいっから白い。もしかしたらふつうのカンバの木が白樺に成って行くこともあり、白樺がふつうの灰白色のカンバの木に変化することがあるのかも知れないと、非科学的なことを考えたりする。他の鳥の声がしなくなってもピヨロツピヨロツと、一カ所で鳴きつづけている鳥もあった。ほかの鳥がほかの場所へ去って、いなくなっているのに、その小鳥だけがまるでその地点にすがりついたように、さえずりを止めないのをきいていると、それでいいのかなと考えられてくる。ピヨロツピヨロツ、パイッピヨロ。

炊事場の窓、二階の寝室の窓からのぞくと、さくらの花が目の前にあって、おどろかされる。おどろかされたいため、わざとそうすると言えと言え言えけれども、それにしても、やはりその度に新鮮なおどろきを正直におぼえる。

さくらの木と他の木が、あんなり似ていて、よりそうように、お互いにじゃまするように立っているの、他の木にさくらの花が咲いているように見えることもあった。うかび上った白い点、ちらばったような、まとまったような白い点がそよぎはじめる。まだ、霧は少しも去らない。

「明るい農村」の番組がおわった。山形県の温泉の榎の芽だし作業。愛媛県の酪業ヘルバア。新潟県の毒消し売り。

学者の解説や意見より、農民のはたらいっている姿の方が、自然に感じられる。

朝が明けたのに、霧の白さが少しもうすれないのは、それだけ霧が濃くなっているからだ。鳥の声もしなくなった。さくらの色は少しでもあかるくなっただろうか。うすもも色も少しは見えはじめているけれども、まだほんとうの「彼女」自身の色がすっかり見えているわけではない。

もう一度たしかめたくなって、山靴をはきステッキを手にした。家の中の坂をのぼり、家の外の坂を左へくだる。道のまん中だけ、霧が濃いように思われるのは、そこは雑木の枝の影がなくて、霧だけたまっているようだからだ。

足に力をこめねばならぬ急なぐらで、両側にやはりさくらがあった。どうしようもなく枯れて倒れかかった、老人くさいボサだったのに、やはりそれが白い花をつけていた。さくら色という形容をつかわないで、桃色と私は言いならししてきたが、こうまでどこにもさくらの花が霧の白さにかすみながらはつきりしているのを眺めながら歩いて行くと、やはりさくらの花をさくら色と言ってもかまわないような気がした。

黒い焼け砂の斜面は黒いままでなだれかかっているが、道をはさんだ低い斜面のトゲの木や野バラ、赤みがかって長くまいたつるの木や、白くかわいた去年のすすき、また

は真直ぐのびた月見草の向う、その下にさくらがさいていた。左へ折れて、また登りにかかる。そのあたりには泥の表を細く盛りあげ、モグラの走ったあとがあった。

細い枝が四方に茂っていて、よく見るとそれにも枯木らしいさくらの、長くのびた枝のはしっこに白い花のついたのもあった。「あんた、おききなさい。私が啼いてあげます」と言いたげに、いきなり耳のそばでウグイスが見事すぎるほどの鳴き方で啼いた。

「あそこまで行って見よう。あそこにはまさかさくらがなかったはずだが」と、もう少し行くと、雑木のしげみのうしろに、やっぱり白い花がうかんでいた。柏の葉、魔術師の老婆の大きな手のひらのような茶褐色の葉のかげに、かくれ咲いている花もあった。

枯れかかった雑木の、ほんのわずかな部分にやっとしがみつこうにして、咲いている哀れな花があるので、近よって見ると、実はそうではなくて、枝ぜんたいに勢いのよいつぼみがふくらんでいるのであった。空は霧いろの壁のようにひろがっているのだから、空は見えないと言ってもよいのであった。したがって、あたり一面、かくれるように、ひかえ目に咲きみだれている花が、空にうきあがって見えるということはないのであった。青い空なら空といえるけれど、空と地面が一つにつながっているのだから、花

は空を知らないで、ただ咲いているのであるし、もしかしたら「咲いている」と言われるのをいやがるように、それこそ「ほころびている」と言った方がいいのかも知れない。

雪が消え、さくらが散りはててから、リスの往来が目立ってきた。私たちの庭に撒いた餌だけをねらって、自分たちの力で林の中で餌を探すのを止めにしてしまったのかも知れない。

テレビをかけてあっても、私たちの話し声がきこえていても、あまり恐れなくなった。一度など、ペランダを渡ってきて、ガラス戸にかかるくぶつかり、どうしてぶつかったか不思議がるように、室内をのぞいていた。人声がするときこそ、餌が豊富なのであるから、むしろ人声のするのにつられて近寄ってくるらしい。

私は「リスは可愛い」と思わないように努めている。可愛いことを信じたくないと言うより、「可愛いわ」と言う女性や子供の感情が信用できないからだ。「可愛いわね。ほんとに可愛いなあ」と、むやみにくりかえすことで、可愛いという感情をたっぷりもっている「いい人」らしく見せるのはきらいだ。ほんとうに可愛いと思って可愛いと言わずにいられないにしても、もう少し反省というものがあ

ってもいいような気がする。しかし私だって実は、ときどき可愛いと感じて見とれてしまうのである。

というのは、ネズミが可愛くなくて、なぜリスが可愛いという問題（まあ、それほど大げさではないが）が、私に降りかかってきた（浸みこんできた）からである。

山の家のネズミは小さい。にくらしいほど大きなネズミなど、一匹もない。日本の山岳地帯に特別に棲んでいるヤマネかと思うが、そうではないのかもしれない。ヤマネの別名は、芸者ネズミと称する（これも、まちがっているかも知れないが）から、まことに繊細で、ネズミ好きの人なら、愛玩用にしたいくらいのものであろう。ヤマネでないとする、野ネズミということになるが、山野を荒して農民を困らせる勇猛な野ネズミとは、たしかに種類がちがっている。とにかく、小さくておとなしい。おとなしくかくれていて、めったに姿を見ることもできない。だが、弱いいかどうかなとなると、どうもそうではなくて、なかなかつかまったり死んだりはしないのである。

うちのネズミとりは、針金製の箱の上部に丸い入口があり、その下に吊り下げられた餌（うちではチーズを使用する）をねらって、ネズミがそこから降りていくと、二度と登ってこれない、逃げ出せない仕掛けになっていた。つまり針金の尖端が下向けになっているため、入口は下すばま

りになっていて、いざ下から昇るとなると、針金が細い槍のようにかたまっていて、とても痛くて、通りぬけがむずかしいのである。

ある日、一匹がつかまった。つかまったらしい気配なので、のぞきに行くと見事に箱の中に捕えられて、出られなくなっている。「やはり、つかまったか。この箱の効き日はたいしたものだ」と思いながらも、つかまったネズミをいつ、どうやって殺すか、それを考えるのがめんどくさいので、責任のがれをするように、そのままにして寝てしまった。目がさめてから、またのぞきに行くと、すでに「彼」の姿は消え失せていた。

次の日には、入口の針金の尖端をもっとすぼめて「これなら、いくらなんでも痛くて脱け出せないであろう」と言う具合にしておいた。そして、また一匹かかった。「よくかかるな。よっぽどチーズが好きなんだろうな」と思いながら（そうは思っても、はたして喜んでいただけの喜んでいなかったのか、自分でも判断がつかなかったけれども）、私は寝てしまった。そして目がさめるが早いかたしかめに行くと、またしても「彼」の姿は箱の中から消え失せていたのであった。

そうやってネズミとりは熱中している一方、私、私たちはさかんにリスに餌をくれてやり、リスをつかまえる気持

など全くなしで、リスを可愛がろうとしているのであった。そのようにしてリスとネズミの両方にかかずらっているとは、さほどこまやかに観察しないでいても、リスとネズミがはなはだ似ている動物で、一挙一動、見れば見るほど同族のように思われてくるのであった。

たしかに、室外のリスと屋内のネズミは、おたがいに関心しあひも憎みあひもせずに、無関係に暮しているにちがひなかった。それなのに私、私たちは片一方を生かしてやろうとし、もう片一方を生かしてやるまいとしているのであった。

ゆでる前の干うどん、スバゲッティをボキボキと短く折ったような形の殺鼠薬。それは、ピンク色をしていた。もっと古風に桃色と言いたい、素朴な田舎風の色をしていた。その殺し薬を、暖炉の上の皿などに載せておくと、「彼ら」が食べたらずくて、薬の数は減じて、あたりに散らかっていた。しばらくたって暖炉の上の麦藁帽子を見ると、そのへりに桃色の断片が運ばれていて、帽子のてっぺんの凹みの中にまで、ちゃんと置かれていたのであった。そればかりでなく、炊事場の棚の徳用マッチの大箱の中にまで、その桃色の断片がはこびこまれてあった。マッチの棒のатаマも赤い色をしている、その色と少しはちがうが、やはり赤の一種である固形の薬が、おびただしく運びこまれ所蔵

されてあるのを眺めると、ゾッとせずにはいられなかった。「彼らは一体、それを食べたのであろうか。それとも、いたずらをして運びうつしているだけなのだろうか」

ネズミの死体は一回も発見されはなかった。「食べたらしいぞ」と考えて、桃色物体を補給しておく、それもいつのまにか消滅しているのであるが、それだけ、他の場所（ネズミの死体ではなくて）桃色物体が発見されることが多くなるばかりなのである。

「ネズミの心理はわからない」と妻は日記にしているが、そもそも心理などという言葉をもちいるのが、そのもちい手の心理を疑わせる、気持ちのわるい事態であるにちがひない。ネズミの心理。ああ、私、私たちはほんとうは、そんなものはよくよく考える必要もないし、考えたって考えつくせるはずのないことを、前もってすでに感じとっているはずなのに。

彼らの死体が発見されないからと言って、毒殺された彼らの死体が、どこか山小屋の一部に、私たちの見出し得ない場所に、積みかさなっていないという保証はないのである。彼らがぜんぜん食べないで、ただただ持ちはこんでいるということは、奇蹟というよりほかないような、おかしい現象である。持ちはこんでいるのは、彼らがその物体を好きだ、愛していることの証拠であり、好きで愛している

なら食べてもいいはずであり、食べたなら死体と化してもいいはずなのであるが。

ある日、突如として、彼ら一族が死んで（もちろん自然死ではなくて、コロサレタのだ）積みかさなって腐臭を発している現場を目撃する。そのような予想を、私は好まない。私は、彼らを愛してなどいはいはしないが、それでもそのような予想を、私は好まない。汝がソレを好まないなら、汝は心ひそかに彼らを愛していたのではなかったのかと問いつめられても、私はその質問者を「青い眼」ではなくて「白い眼」でにらみかえして、そっぽを向いてしまうにちがいないのだ。だって私はげんに、ネズミ捕り器をそなえつけ、ネズミ殺しの薬を充分すぎるほど執拗に撒いておいたではないか。

リスどもは、次第になれなれしくなりはじめている。ニンゲンのあたえる餌だけを目あてにして、同じ場所に餌をあさりにくるようになって、それでも彼らは大丈夫なのであるうか。なまけ者になって、ニンゲンの去ったあとでは、餌探しが不可能になるのではあるまいか。私は毎朝、毎晩、あくことなく彼らの動作を見つづけてはいるが、もし私が彼らを「見る」ことをやめにしたって、それで私の生命がおびやかされるといふことなど、ありはしない。「見てやらない」からと言って、私は私でありつづけることができる。

る。

リスは、どうやら三四らしい。一匹は意地わるで、他の二匹を逐いはらって、餌をひとりじめにしようとする傾向がある。しかし私は「三四だな」と思ってたえいばいいのであって、意地わるの奴はよろしくないと感じたりはしない。どうして私にとって、あるリスがよろしくないリスであって、他のリスがよろしいリスであるというようなことがありうるだろうか。

第一、私には三四のリス諸君が親子だか夫婦だか兄弟だか、それに性別もわかりはしないのである。わかったからと言って、それで彼ら（彼女ら）と私の関係は深まりもしないし、うすまりもしないではないか。

それにしても、この三四の体格は立派とは言えないだろう。どのような毛色がリスの真の色であるかはわからないけれども、どの一匹も痩せて灰色で（ネズミより上等とは申されないぐらい）貧弱なのであった。

二本の前脚で餌をかかえて一心にたべている姿。それが可愛いと、一般には思われている。しかし、もしかしたらネズミだって時たま、そのような食べ方をしてのたろう。パンをたべるよりは、クルミをかじる方が時間がかかる。彼らは黒パンより白パンを好むらしいにしても、彼らの生存の歴史に「パン」が出現したのは、私が山小屋を建てて